

グラミンバンクに学ぶ

昨年、インド、バングラデシュを回り、グラミンバンクを訪問する機会を得た。周知のように、同行とその代表者であるユヌス氏は、マイクロファイナンスの展開による貧困問題解決への貢献が高く評価され、2006年、ノーベル平和賞を受賞した。同行の貧困者向け融資の手法は、現在、多くの開発途上国において同様の取組みが行われている。しかし、その思想、取組みの姿勢は、決して開発途上国においてのみ適用されるものではなく、現代の日本にとっても多くの示唆に富むものといえよう。我々の学ぶべき最大の点は、金融における「関係性の回復」とでもいうべきものであるように感ずる。

近年における「金融工学」の著しい「発展」は、もっぱら具体性、関係性をいかに捨象するかという点を中心に展開してきた。例えば、デリバティブと総称される数々の金融商品は、個々の資産の有する具体的な特性を捨象し、その価格のみを体現する商品として、多くの投資家の参加を可能とするものであった。WTI原油先物に投資をする投資家(の恐らく大半)は、原油がどこに貯蔵されているかということなどには全く関心がない。デリバティブと並ぶ金融革新技術とされるストラクチャードファイナンスの本質は、多くの金融資産を集合させ、それを切り分けることにより、それぞれの資産が有していた個性を切り捨て、無個性な資産として多くの投資家の参入を可能とすることにある。日本でそれを組み込んだ投信を購入した投資家は、その資金が、遙か遠いロサンゼルスで学生が始めたベンチャー企業に投資されている(かもしれない)ことなど、ほとんど意識することはない。

グラミンバンクの取り組むマイクロファイナンスは、こうした現代の金融技術とは、ある意味、対極にあるものといえよう。融資した資金が、誰に、どう使われ、その事業がどう展開していくかが、まさにその持続性の鍵となる。家事に追われていた農村の女性たちがどうやって事業を立ち上げていくか、それをサポートし、アドバイスしていくことが、金融機能と一体的に行われなければならない。その過程は、農村の女性たちが自立し、少しでも良い暮らしを実現していくための過程に他ならない。ヤギを1頭飼う、ジュートの小物を作って売るといった、個々の取組み自体はほんの小さなものにすぎないが、そうした小さな事業の広がり、積み重なりが、いつの日か家計を変え、村を変え、地域を変えていくかもしれない。現在バングラデシュにおいては、多くのNPOがグラミンバンクと同様の取組みを開始しており、活動の面的な広がりを感じず。グラミンバンクのノーベル平和賞受賞は、まさにそうした活動の広がりに道を開いたことを評価してのものであるろう。

協同組合の金融は、本来そうした性格を強く持っていたものであるように思う。今日のが国における地域の状況は、まさに、そうした本来の協同組合金融を必要としているのではないであろうか。「資金需要が無い」という言い方がよくなされるが、マイクロファイナンスの取組みは、資金需要を「探す」のではなく、資金需要を「創っていく」ことに他ならない。

((株)農林中金総合研究所 取締役基礎研究部長 原 弘平・はらこうへい)